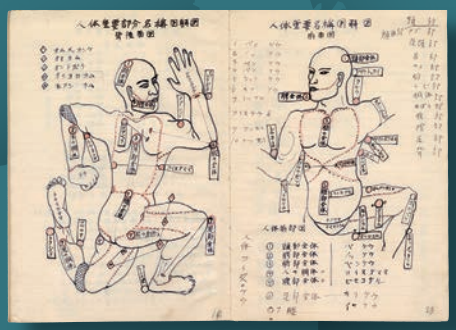
アヌココロ アイヌ イコロマケンル ソンコ 国立アイヌ民族博物館 ニュースレター アヌアヌ vol.011 2023 FEB

ANUANU

ルウンペ（木綿衣）
西田香代子作（個人蔵）



アイヌ語人体名稱論（壱）号
山本多助著（釧路市中央図書館蔵） 年代：1963年

人形と丸木舟
山本多助作（一般財団法人前田一歩園財団蔵）

［第4回テーマ展示］ 地域からみたアイヌ文化展

アカント ウンコタン

―阿寒湖畔のアイヌ文化―

イクパスイ
山本多助作（個人蔵）

人形劇「ふんだりけったりクマ神さま」の人形
クマ神さま
（阿寒アイヌ工芸共同組合蔵）

人形劇「ふんだりけったりクマ神さま」の人形
火の女神さま
（阿寒アイヌ工芸共同組合蔵）

基本展示室のこの展示を見て！ ／ 博物館 Pickup!
見て見て！館内サイン⑪ ／ 探究展示テンパテンパ ⑨最終回 ／ 調査研究最前線⑤
ウポポイってこんなとこ⑧ ／ 国立アイヌ民族博物館からのお知らせ

NATIONAL AINU MUSEUM

第1章 歴史

1908年に阿寒湖畔初の旅館が開業。1934年には国立公園に指定され、戦後の北海道観光ブームのころには、各地から移住してきたアイヌが増加し、現在の阿寒湖アイヌコタンが形成されました。本展示で紹介する阿寒湖畔のアイヌ文化は、こうした経緯のなか、他の地域には見られない独自の歩みによって受け継がれています。

1965年ごろの阿寒湖アイヌコタン
写真提供:床明

第2章 工芸

阿寒湖畔には、伝統的なアイヌの民具であるマキリやイタ、丸木舟をはじめ、木彫りのクマや「カムイニ」(トーテムポールのようなもの)まで、大小さまざまなモノを手がける作り手がいます。各地の人びとが阿寒湖畔に集まり、切磋琢磨し技術を高めてきたことが、今日の作品づくりへとつながっています。この素晴らしい技術と作品、そしてその作り手たちを紹介します。

ル(道)
床ヌプリ 作
(個人蔵)

春風
瀧口政満 作
(個人蔵)

第3章 芸能

先人から受け継いできた歌や踊り、そして物語を演劇化した「ユーカラ劇」や「人形劇」、現代のデジタル技術を取り入れた阿寒ユーカラ「ロストカムイ」など、阿寒湖畔での伝統的な芸能から新たな技術を取り入れた芸能について紹介します。

阿寒ユーカラ「ロストカムイ」
写真提供:釧路市産業振興部阿寒観光振興課

第4章 共に歩む人たち

阿寒湖アイヌコタンには、民族の違いを越えてアイヌと協力しながら、アイヌ文化に寄り添い生活している人がたくさんいます。阿寒湖アイヌコタンに縁の深い「前田一歩園財団」、「ペウレ・ウタリの会」の2団体を紹介します。阿寒湖畔を拠点に、どのようにしてアイヌとアイヌ以外の人たちが共に歩んできたのかを振り返ります。

前田光子が床タミより贈られたテーブルクロス
床タミ 作(一般財団法人前田一歩園財団蔵)

第5章 ことば

あいぬごじんたいめいしょうろん(いち)こう
アイヌ語人体名稱論(壱)号
山本多助著(釧路市中央図書館蔵) 年代:1963年

『アイヌ・モシリ』をはじめとするアイヌ語・アイヌ文化に関する著作を多数残すなど精力的に活動された山本多助(やまもと たすけ)エカシ(1904～1993年)の功績、店名や施設名などで使われてきたアイヌ語、アイヌ語や物語を通じてアイヌ文化を学ぶ取り組みを紹介します。

第6章 観光

阿寒湖畔は、雄阿寒岳・雌阿寒岳等の山々と湖が隣接した自然豊かな地域です。伝統文化を受け継ぐアイヌや、地方から移住した人びとが民芸品の制作・販売や飲食店を営み、舞踊等を披露するなど、ここは観光の一大拠点となっています。アイヌの伝統儀礼に則(のっと)った祭事やアイヌ文化と調和した街並みづくりに、官民が協力して積極的に取り組む姿勢も阿寒の魅力の一つです。

上)まりも祭り まりもを送る儀式
写真提供:阿寒観光協会まちづくり推進機構

左)夏の阿寒湖アイヌコタン
写真提供:釧路市産業振興部阿寒観光振興課

第4回
テーマ展示

地域からみたアイヌ文化展

アカント ウン コタン
—阿寒湖畔のアイヌ文化—

阿寒湖畔では、アイヌ文化の伝統が観光業に携わる人びとの間で受け継がれ、発展してきました。民具や土産品の作り手たちは、阿寒湖畔の観光地化とともに各地から集まり、切磋琢磨して技術を高め、また、芸能や儀礼は観光の中でも受け継がれ、新しい文化も生み出してきました。アイヌ語は、店名や施設名などに使われることでも、身近なものとなっていきました。伝統を正しく受け継ぐとともに新しいものを生み出していく阿寒湖畔のアイヌ文化は、民族の違いを越えて寄り添う人びとの協働によって成り立っています。本展覧会では、このような阿寒湖畔で花開いたアイヌ文化を紹介します。

この展示は、アイヌ文化の独自性や多様性を地域単位で紹介していく当館のシリーズ展示「地域からみたアイヌ文化展」の2回目として位置付けられています。

会期 **2023.3.14(火)－5.14(日)**

※休館日:月曜日(祝日または休日の場合は翌日以降の平日)
※新型コロナウイルス感染拡大状況によっては会期を変更する場合があります。
詳しくは当館ウェブサイトをご覧ください。

会場 **国立アイヌ民族博物館 特別展示室**

※博物館の入館料は、ウポポイ入場料に含まれます。

【主催】国立アイヌ民族博物館　【後援】公益社団法人北海道アイヌ協会

【協力】阿寒アイヌ協会、阿寒アイヌ工芸協同組合、阿寒アイヌ民族文化保存会、一般社団法人阿寒アイヌコンサルン、環境省阿寒摩周国立公園管理事務所、釧路市阿寒湖アイヌ施策推進室、釧路市産業振興部阿寒観光振興課、釧路市中央図書館、阿寒アドベンチャーツーリズム株式会社、一般財団法人前田一歩園財団、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構、鶴雅ホールディングス株式会社

関連イベント 阿寒で受け継がれる伝統芸能の公演や、現代の伝承者によるトークなどの関連イベントを予定しています。

基本展示室のこの展示を見て!

当館の常設展である基本展示室では、
過去から現在までのアイヌ民族の歴史や文化に関連する展示品を幅広く紹介しています。
過去から使われてきた伝統的な民具だけでなく、
現在のアイヌ民族がつくった民具や作品なども展示し、今に息づく文化も知ることができます。

e ウパシクマ
私たちの歴史

考古資料(土器)
アイヌ史のはじまりは人類がやってきた3万年前ごろからです。アイヌ民族の先祖が残した考古遺物を展示しています。

e ウパシクマ
私たちの歴史

松浦武四郎『知床日誌』
19世紀中ごろの北海道を歩き見聞きし、アイヌ民族の境遇を記した版本。当時の様子を世の中に広く知らせました。

f ネプキ
私たちのしごと

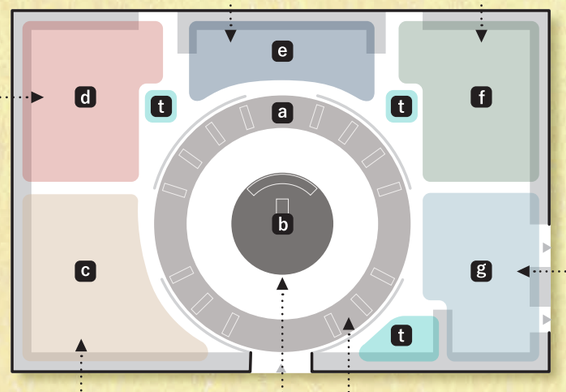
職業展示
当館では過去のしごと(狩猟採集や農耕など)だけでなく、現在のアイヌ民族の職業も紹介しています。

f ネプキ
私たちのしごと

藤戸康平氏の作品
現代のライフスタイルなどに合わせて、使うことを前提に作られたものですが、精巧な彫刻が施されています。

d ウレシパ
私たちのくらし

樺太住居模型
20世紀初頭の研究成果をもとに忠実に復元された、樺太アイヌの冬用竪穴住居。



g ウコアプカシ
私たちの交流

シト(スキー)
スキーを使う文化は樺太アイヌにみられます。滑走部にはアザラシの毛皮が使用されています。

c イノミ
私たちの世界

ヌサ(祭壇)
1937年に十勝地域で収集された資料を帯広アイヌ協会が2019年に復元したヌサ。

c イノミ
私たちの世界

イナウ
当館建設工事の2018年1月の地鎮祭で使ったイナウ。現在でも伝統的な儀式は受け継がれています。

b イタク
私たちのことば

知里真志保 直筆原稿
登別に生まれた言語学者で、その業績は現在のアイヌ研究に多大な影響を与えています。

a
プラザ

アットゥシ(樹皮衣)
アイヌの織りを代表する樹皮の繊維による衣服。定期的な展示替えを行い、さまざまな衣服を紹介します。

t 探究展示 本誌の探究展示テンパテンパをご覧ください。

最新の展示情報や、より詳細な資料の情報については当館のウェブページ
(https://nam.go.jp/exhibition/floor2/basic/#theme_highlights)をご覧ください。

※資料の状態によっては展示内容を変更する場合がございます。ご了承ください。

博物館Pickup!
国立アイヌ民族博物館の収蔵、展示資料をピックアップして紹介します。

厚岸湖出土の板綴舟

アイヌ文化をより豊かにしてきたのは周辺民族との活発な交易でした。さまざまな外来の文化要素を交易で手に入れることにより、アイヌ文化にみられる独自性が築かれてきました。その交易に欠くことができないものが、海を越えて移動する舟の存在です。その舟の中でも板綴舟はアイヌ民族にとって主要な移動手段でした。また人やモノの往来だけでなく、それらに伴う情報の往来もまた重要な要素であったと考えられます。

板綴舟は丸木をくりぬいてつくった底部(丸木舟)に、板を数段に綴(と)じることで舟の高さを出します。それにより高い波を防ぎ、海を越えた広範囲な移動を可能としました。北海道では、9世紀ごろの遺跡から板綴舟の舷側板の一部が発見されており、古くから存在していたことがわかっています。そして北海道、樺太、千島を行き来し、さらには本州や大陸、カムチャツカ半島に住む民族との交易に使われ、さまざまな品物が運ばれました。しかし19世紀以降、国家間の衝突により千島や樺太での交易圏が縮小され、自由な往来が制限されてゆき、それまでのアイヌの生活を一変させました。

当館では、北海道東部の厚岸湖出土の丸木舟(板綴舟の底部)を展示しています。この資料は1987年に行った湖畔周辺のサンゴソウ調査で偶然に発見されたものです。この他にも丸木舟や車櫂(くるまかい)・櫂(かい)が少なからず発見されています。当館の2020、2021年度調査研究でそれらの出土資料8点を年代測定分析したところ、15世紀中ごろから17世紀中ごろの年代に集中することがわかりました。おそらくは、この時期、つまり日本史でいう中世・近世において、厚岸湖が北海道と千島との海上のターミナルであったことと無関係ではないでしょう。

現在、北海道を中心に多くの博物館などでは展示品として復元された板綴舟をみることができますが、当館は当時の舟を展示している数少ない博物館です。実際に使われていた舟から、交易をしていた当時のアイヌの生活を感じることができると思いますので、ぜひご覧ください。

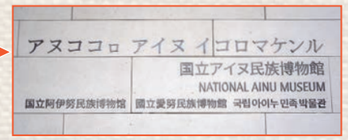
(研究主査　鈴木建治)

厚岸湖で出土した板綴舟(厚岸町教育委員会所蔵)

ウポポイのアイヌ語表示について紹介します。

見て見て! 館内サイン ⑪ アヌココㄹ アイヌ イコロマケンル

国立アイヌ民族博物館



当館の入口に大きく掲げられた施設名も、もちろんアイヌ語で表示されています。アヌココㄹは直訳すると「私たちが共有する〜」という意味。国立の施設は「私たち」(ここでは「国民」)の共有財産であるという意味を込めて、アヌココㄹを「国立」のアイヌ語としました。「博物館」を表すイコロマケンルは「宝物が入った建物」という意味。分解すると、イコㄹ「宝物」、オマ「〜が〜に入る」、ケンル「建物」です。「家」はチセと呼ばれるのが通常ですが、祈り言葉のなかなどでは大きな家のことをケンルと呼ぶことがあります。ここでは博物館の建物を指す特別な言葉としてケンルを使いました。(研究員　深澤美香)

イケレウシ テンパテンパ
—探究展示 テンパテンパ—

9 最終回

「テンパテンパ」は、アイヌ語で「さわってね」の意味。体験を通じてアイヌ文化にふれることができる、大人も子どもも楽しめるコーナーです。
それぞれの体験ユニットをエデュケーターが紹介します。

テケカラペ・シリキ
手しごと：文様

アイヌ民族の手しごとの魅力のひとつは模様です。

さまざまな模様があり、その模様の技法は、木彫りや刺繍（しゅう）や編みなど、複数あります。

このいろいろな模様はどうやってつくるのでしょうか。このユニットでは、実際のサイズと拡大した木彫り、刺繍を施す順番がわかる布、花ござを編む過程などを紹介しています。じっくり見て、さわりながらそれぞれの模様のつくり方を想像し、つくりの繊細さを感じることができます。

ユニットで、彫られたさまざまな模様にふれたり、刺繍された布の表だけでなく裏も見たりしながら、展示室に展示されているほかの模様のある資料も観察し、ぜひお楽しみください。

（エデュケーター　カサド・パルド・ケラール）

テケカラペ：シリキ／手しごと：文様のユニットの刺繍

アミプ
着物

アイヌ民族の伝統的な衣服をよく見ると、異なる素材やかたちがあり、刺繍の有無、刺繍の技法や模様などにも違いがあることがわかります。

「着物」のユニットには、樹皮や木綿、魚皮を素材に製作された小さいサイズの着物があります。樹皮と木綿の着物には刺繍があり、素材の質感とあわせて、細密な刺繍の模様を間近に見て、さわることができます。また、写真右の人形の衣装は、プリントされたもので、内側には素材の説明が書かれています。素材の異なる着物にふれ、さまざまなかたちの衣服を観察し、その多様性を感じてみてください。そして、展示室に展示されている実物の着物の資料もぜひご覧ください。

（エデュケーター　今野彩）

主に刺繍の多い衣服は儀礼などで、刺繍の少ない衣服は日常着として着用されてきました。現在もアイヌ文化の普及・伝承活動を行う際などに着用されています。

探究展示 t.3 には着物のぬりえがあります。持ち帰って色を塗ってみてください。

引き出しで樹皮から布をつくる工程をのぞいてみましょう。このユニットの近くには織り機も展示されています。

素材の説明を読んで、人形に着せ替えてみてください。

テケカラペ・テケトク
手しごと：わざ

このユニットでは、作り手の方々によりつくられた資料を間近でじっくり見たりふれたりすることで、モノの技法などについて、学びを深めることができます。引き出しの中にも資料が入っているので、ぜひ開けてみてみましょう。

私は実際に資料にふれてみて「遠くからみるとわからなかったけど、こんなつくりになってるんだ」「この部分はどんな技法がつかわれているんだろう?」などと、より深く知りたくなりました。

ユニット体験後、展示室の中に展示されている資料を改めて見てみると、みなさんも資料の新たな魅力に気付くことができるかもしれません。

（エデュケーター　長谷仁美）

左上：イタ（盆）、右上：マキリ（小刀）、下：エムシアッ（刀掛帯）

引き出しを開けた様子

当館の研究プロジェクトを中心とした研究成果を紹介します

調査研究最前線 5

Report 1
アイヌ文化に関する絵葉書の歴史資料としての基礎的研究

日本の絵葉書は、1900（明治33）年に私製葉書の発行が認められて以来、さまざまな図像を安価で遠くまで運ぶことができることから、好評を受けて盛んに発行されてきました。

当時は交通機関が未発達で、遠方への旅行が盛んではない時代でした。とくに北海道・樺太各地のアイヌ文化に関する絵葉書は、本州・四国・九州などの住民から見ると、同じ国内とはいえ、自然環境の異なる地域に住む異民族をエキゾチックなものとして見る内容であったことには間違いありません。被写体となったアイヌ民族から見ると、現実とは異なる伝統的なシーン（もしくはその一部）ばかりがアイヌ民族のイメージとして増幅されるという、いらだちもありました。そのような点に注意しながら、被写体となる人物、村落などの風景、民具（衣服、器物）などの分析を進めることで、図像の年代、地域等を知ることができる可能性があります。

中には、アイヌ民族のメッセージを読み取ることができる絵葉書もあります。当時、さまざまな発言を行っていた伏根弘三（ふしねこうぞう）（1874～1938）による同族を激励する文章は、絵葉書の中の立て看板の中にありました（写真3）。

「顧レバ亡行ク民族トシテ　シヒタケラレ悲観ト脅威ノ下ニアリキ　凡ソ事物ノ改善向上ハ自覚ト発展トニヨリ成就サル　吾等同族ハ富士ノ裾野ニアリテ迷ヘル小羊ノ如キ有様ナルガ新シキ年ニ入リ新シキ日ニ際シ向上発展ヲ期シ此ノ富士ノ頂上ニ達スルノ意気ヲ以テ民族改造ノ出発点ニ先ツ其ノ第一歩ヲ踏ミ出サントス　大正十四年春　北海道十勝アイヌ　伏根弘三」

また、絵葉書にも編年と呼べるような目安があります（表1）。郵便関係法令に基づいて、宛名面の下部にある通信欄は20世紀前半の間に、3段階で拡大しました。1期の頃は宛名面には文章を書くことができなかったのです。さらに、宛名欄上部の郵便はがきの表示の変遷など年代を知る資料的な指標があります。これらの年代的指標を基礎として、図像の内容分析、発行所に関する情報の整理などを行っています。

（資料情報室長　田村将人）

写真1　【2期】1910～12年、白瀬矗の南極探検に犬橇係として参加した樺太の花守新吉。

写真2　【3期】彩色。熊の檻（おり）と人びと。スタンプに「旭川アイヌ酋長川上コヌサ」とある。

写真3　【4期】伏根弘三による「式辞」が読みとれる十勝の絵葉書。

表1　絵葉書の発行時期の目安

期	年代	宛名面の通信欄	上部の表記等
1	1900（明治33）～1907（明治40）年	なし（0）	「きかは便郵」
2	1907（明治40）～1918（大正7）年	下部1/3	「きかは便郵」
3	1918（大正7）～1933（昭和8）年	下部1/2	「きかは便郵」
4	1933（昭和8）～1946（昭和21）年	下部1/2	「きがは便郵」
5	1946（昭和21）～1968（昭和43）年		「郵便はがき」
6	1968（昭和43）～1998（平成10）年		郵便番号3～5桁
7	1998（平成10）～現在		郵便番号7桁

Report 2
アイヌ文化関連施設における「アイヌ語の多言語化」課題
—中国語を目標言語として

ウポポイの開業をはじめ、国内外でアイヌ文化への注目度が高くなってきた今日、アイヌ文化を正しく海外に発信するため、日本語・英語以外に、さまざまな言語でのアイヌ文化の紹介・翻訳作業が急務になりました。しかし、日本国内における多言語サービス対応は、検討の歴史が非常に短く、最初の指針は、国土交通省観光庁が2014（平成26）年3月に発表した「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」でした。国内において英語以外の、ほかの言語を目標言語とした多言語翻訳やサービス対応は始まったばかりで、言語の選択、翻訳対象の確定、文字案内と音声案内の作成などさまざまな課題があります。さらに、ウポポイをはじめ、アイヌ文化関連施設の表示作業をするためには、「アイヌ語の多言語化」という課題が浮かび上がります。

当館の研究プロジェクト「アイヌ語の中国語表記法」では、「アイヌ語の多言語化」という課題を提起し、その一例として、中国語を目標言語とするアイヌ語の表記法の調査研究を行いました。メンバーは代表の劉のほか当館職員の深澤美香、小林美紀、矢崎春菜、中井貴規と、館外の中国語・アイヌ語有識者にも協力を依頼しました。

従来の多言語事業やその指針で検討されているのは、日本語が起点言語、ほかの外国語が目標言語であり、ウポポイの多言語化作業とは根本的に異なっています。ウポポイではアイヌ語が第一言語として位置づけられているからです。すなわち、多言語翻訳の起点言語はアイヌ語、目標言語は日本語およびほかの外国語です。当館の展示資料のキャプションをご覧いただくとわかるように、第一言語のアイヌ語が先頭に表示されており、ついで、日本語、英語、中国語、韓国語と表示されています。翻訳対象によっては、ロシア語とタイ語にも対応しています。

当プロジェクトが令和2年度に行った調査研究では、ウポポイを含めた、国内のアイヌ文化関連施設32カ所の多言語化状況を比較し、もっとも難問となっていたアイヌ語から中国語への多言語化に関する問題を検討しました。主な問題点として、①アイヌ語から中国語漢字への翻訳・表記の方法、②国内における中国語とその文字である簡体字・繁体字に関する混乱（文字を言語の違いと捉えていること）、③民族学の専門用語の翻訳方法（音訳と意訳を組み合わせること）の三つをまとめました。そして、当プロジェクトの成果としてアイヌ語の中国語表記法を試作し、当館の特別展示に試用を開始しています。

（アソシエイトフェロー　劉高力（りゅうかおり））

図1　当館キャプションの一例

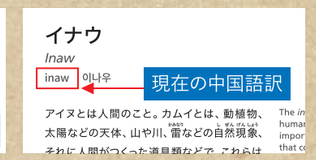


図2　当館のイナウのキャプション

ウポポイってこんなとこ 8

いよいよ最終回！

体験！ウポポイグルメ 3 of 3

「食」を通してアイヌ文化を気軽に体験。

ウポポイでは、アイヌの伝統料理や、その調理方法・食材を用いた軽食から本格グルメ、オリジナルスイーツを提供しています。ゆっくり楽しむお食事や、ちょっとした休憩にご利用いただけるレストランやフードコートを3回にわたりご紹介してきたこの企画もいよいよ最終回となりました！

sweets café ななかまど イレンカ

北海道の白老町駅前の「ベーカリーショップ ななかまど」などを手掛けている社会福祉法人白老宏友会が運営しているスイーツテイクアウトショップ。

北海道産の濃厚なチーズ、白老産のたまごを使用したカップチーズケーキと北海道産リンゴを使用したアップルパイがイチオシです。

ソフトクリーム、ソフトドリンク、自家焙煎珈琲、季節限定のパイ、土産菓子やアイヌ文様をモチーフにしたオリジナルグッズなども販売しています。

いちごクンネチュプカップソフト（税込500円）

クンネチュプ（カップチーズケーキ）常温orアイス 全3種 •プレーン、ココア（税込各230円）•イチゴ（税込260円）

パピリカパイ •アップルパイ（税込450円）•季節のパイ（税込530円）

場所	ウポポイ無料エリア（歓迎の広場）
営業時間	9:00～ウポポイ閉園時間
電話	0144-85-5005
座席	店内に座席はありませんが、屋外のテラス席をご利用いただけます。（イレンカ専用席ではありません）

メニュー表

◎ウポポイの入場に関するお知らせ

撮影／北海道開発局

ウポポイ入場券（有料）

入場券はウポポイ窓口でお買い求めいただけます。
なお、ウェブサイトでの事前購入も可能です。

博物館入館整理券（無料）

混雑緩和のためウェブサイトでの博物館入館整理券の事前予約を推奨しております。なお、事前予約をしていない場合、博物館窓口にて当日分の整理券の取得をお願いいたします。

各チケットの取得はこちら

国立アイヌ民族博物館からのお知らせ ～ 次回展覧会

《第6回特別展示》

アイヌ文学の近代

―バチラー八重子（やえこ）、違星北斗（いぼしほくと）、森竹竹市（もりたけたけいち）―

会　期：2023（令和5）年6月24日（土）～8月20日（日）
会　場：2階 特別展示室
観覧料：有料

アイヌ民族にとって、明治から昭和とは、生活に大きな変化が起こった時代でした。その当時、生活の実態を歌として詠んだアイヌ民族が各地にいました。バチラー八重子は『若き同族（ウタリ）に』（1931年刊）を、違星北斗は没後に『コタン 違星北斗遺稿』（1930年刊）がまとめられ、森竹竹市は『若きアイヌの詩集 原始林』（1937年刊）を出版しました。彼らが残したノートや民具から、伝えたかった思いに迫ります。

NATIONAL AINU MUSEUM 国立アイヌ民族博物館
https://nam.go.jp/

ウポポイ NATIONAL AINU MUSEUM and PARK 民族共生象徴空間

■お問い合わせ
公益財団法人 アイヌ民族文化財団（ウポポイ内）
住　所：〒059-0902 北海道白老郡白老町若草町2丁目3番2号
電　話：0144-82-3914　FAX：0144-82-3685
メール：info@ainu-upopoy.jp

ウポポイに関する詳しい情報はウェブサイトをご覧ください。
ウポポイ 検索
https://ainu-upopoy.jp/

※アヌアヌは、アイヌ語で「もしもし」の意味です

国立アイヌ民族博物館ニュースレター「アヌアヌ」第11号　編集・発行：国立アイヌ民族博物館　2023年2月発行　印刷：凸版印刷株式会社　ISSN 2435-8207